泊船集

元禄十一年板

上中下

911.3
八

泊船集叙

黄門定家卿の日誹諧と申侍ハ利
口なるものゝことあさむくよふなる人の云なし
なまものなんとつたへものいをぬりものとものゝい
まゝ利口し あるまゝに成候し 誹諧
とつよ字まろきを滑稽よりして註し
給へるものゝわして今の正風体とて
好るを滑稽ハ俳優楚也よいひて楚人に

答しか如し本歌にも一休和尚乃人
にまし候るまじきなりんこうし
さも八人に於ある答雑乃上にあ
る乃をいかいましていえゆる利口なるにハ
ま世にをいかいと書ういへるもの八只數
しま乃上にあめてのまなるをいかい乃
こころハよろは乃道よろしの乃わさなり
みなめてし有ぬ感じつゆまゐ乃をいかい

歌と歌乃字を隔て書るも乃有なる
へしをいかい乃正風ふるし今年と名を
もして道に背ける人もきく明遠く
八瀬名俊頼寄り時まさ西行乃氏
此阿道く八宗祇宗旨なとの吟八
書く三筆まる人ふるしれるなし其吟
跡八一端にとはめて深く感情を呻
吟しまるまに多くまき自然に應てる

いつゝきて西行宗祇乃あとをしたへめる
人も聞さりけるに宗鑑貞徳より以下
ましめたひてゝ世人此時ゝの人乃
好乃世を全きるをしれる集時に
宗因もし古風をつき聞ゝ風流世に行
買はれまさし道に廣くなりたれる時
哉乃又支師芭蕉翁もて奥乃まれし
西行宗祇乃足跡をしたひし思ひあつき

後にて八代集数冊及ひ連歌ハ宗祇の頃より
又五歌仙世にひろまりさるもの
なくて新しき風流を起し
正風乃躍ありせ好む人を集不易
乃まこと一時流行のうつり変格あらはしけや
其はるかのちまてしあらまさりし
猶あまたひしハまさしき蕉翁門
其乃都此乃きこゆる上代にありとしつよ

やゝやく宗鑑貞徳とうつりてなひ〳〵と
先師を待してはしめて正風ゆゝ入されは
えいきりわかつうそらなれも今の世
人麿赤人再生してもいかにあされ
高貴の人も此掌を撫してましと称せん
ましとはたんのうの高のしゝ中面さる人々の会祀
世はあり字んしうより先師の流字
遺稿旅泊の書をまとし津〳〵浦〳〵に

もてあそびき 今捨ぬとも書く残篇を
此集にあ識ハ人の耳にのこれるほ
句を拾ひ集めしハ新古をわかたす同
士の家にかくせる遺章一行ももらさす
廻りよりあつめたるハうしろに集めて泊船堂
の遺稿のひとつとなしぬ 僕つたなき
筆をつくねて侍れと魯魚の多からん人
校正一あまく其連歌の遺韻文章

あるの紀若干今さしこえぬ尚あらく
よろこび帰る暁あらくしも　あまたく
りしとしかな

元禄拾一寅のとし
初秋

風國謹識

泊船集巻之一

芭蕉翁道の記

千里に旅立て路粮をつゝまず
三更月下無何に入と云けむ
むかしの人の杖にすがりて貞

享甲子秋八月江上乃破屋をいつる程風乃聲そゞろ寒氣なり

野ざらしを心に風のしむ身哉

秋十とせ却て江戸を指故郷

関越る日は雨降て山皆雲にかくれたり

霧しぐれ富士を見ぬ日ぞ面白き

何某ちりと云けるは此たび路のたすけとなりて萬いたはり心を尽し侍る常に莫逆の交ふかく朋友に信ある哉此人

深川や芭蕉を富士に預行　ちり

富士川のほとりを行に三つ計なる捨子の哀氣に泣有

流あの大井川乃早瀬にかゝりて
浮世乃波をしのぐにまさるを
露らその身乃命まへかを枕とし
寝覚し小萩がもとの秋の風ともよ
ひやゝかなるあすやさてはまへん
と袂ぐるの嘆あなげきしけるを
猿ならまどしへますし子よ
あまのかゞかいうれ

いかならや汝ちゝにはまれ
あるゝの母年しらとまりしあるの
又ハなんぢを悪みてあへて
母え汝をうとむるあらし
唯是天にして汝の性乃
つゝなきをなす事

大井川越る日まて孫日雨降くれも
秋乃日乃雨綴しよちかて
指折ん大井川

眼前

道のへの木槿ハ馬にくハれけり

二十日餘りの月かすかに見えて山の根ぎハいとくらきに馬上にむちをたれて数里いまだ鶏鳴ならず杜牧が早行の残夢小夜の中山に至りて忽おどろく

馬に寝て残夢月遠し
茶のけぶり

松葉や風瀑〻の伊勢に有けるを尋ね音信て十日ばかり足をとゞむ

くれて外宮に詣侍りけるに一の鳥居の陰ほのくらく御燈處〻に見えてまた上もなき

嵐れ松風身にしミわたり
峯のさむさを[illegible]して
みつゝ月なし
みどりせん杉を
抱(ダク)あし
腰間に寸鐵を不帯 襟下
一嚢を急ぎにまに十八の
珠を推持ふ僧に似て
塵ある俗に紛てものうし

鉢僧にあらねども
嚢なきりの八浮屠者なれ
属にまよく俗にし神家に
入をゆるさて

西は谷の嶺のもとに深あかえ
なきも乃草あるふらん
いもあふ女西行
なゝしゝのひのまん

其日乃くさあら菓店にしば
見かゝる事ていとゝかゝる人に
あくの筋に發句せよと云て紙に絹
もしかしけり書付侍る

蘭乃香や蝶乃翅にたき物す

閑人乃茅舎をとひて

蔦植て竹四五本乃あらし哉

長月初故郷にかへりて北堂
乃萱草も霜枯果て今は
跡だになし何事も昔に替り
てはらからの鬢白く眉皺
よりて只命有てとのみ云て
言葉ハなきにこのかみの
守り袋をほどきて 母乃白髪
おがめよ浦嶋乃子が玉手箱

[illegible]

なんてんの眉はやさしかり
とさゝゝゝ八なりし
まよひゝゝて消ん
かのこゝてあつま
秋乃霜

大和國ハ北に掛して當下
乃郡和し加内と一郡よいつる
むらをなしハまいり乃ちりしの雨星あきし

目路ハ海かくて里を体す
嶺をめぐらし家有
和くてや琵琶色ヶ斜らむ
ゝ乃松く

二上山當麻寺詣にて座し乃松
かゝる所ニ凡おとせゝへ参詣ん
大いさ年とのゝきとしいふ座さん
この遑非情といへども仏縁ゆゑ
のれゝし餐竹せん息花ときぬら

川たえず幸にしてゆへとし
僧都顔見えて法師　旦生
獨り野のたくへり給ふ樽
なしほとしに山深く白雪故なを
又は宗の桐谷を埋みて
山家の家にもちもとく西より
まさ候して東よりひとなたしたの
蓮生法師の庭にまふ
是しくの山に入て世を越えすれ

あら人の古にしへの詩のけれ
三のしにのへるして唐土の
鷹山とはなるにまさらで
おもしろきや
ある谷に一葉をとりて
陸奥てれしれなとききよや　蝸牛露
西上人乃草乃いまりのあとは
奥乃院より右の方二町そのわきの往へ

稚葉人ならよのさとの名かつらよ
まとしさらしお命をへあてとる
いとあはれし彼とらしみ請ほ
そもしかからせとやんとて今は
なそりしとせ下露ある
露とらしむかよふお世に
うきや
若見枝桑に何実あるも
うきふりゆくはもあれ
枝由に告えて耳をいわき

山を登り坂を下るに秋の日既
斜にかたふきて名あるさかへん
殘りて先情脱敵常ならぬ陵を
有けり

御廟年を経てこの穴
何をしのふ

大和より山城を経て近江路に
入て美濃にかゝるにまた山中
とをりていふ常盤乃塚あり

伊勢乃守武がいひけるよしとも
殿に似たる秋風とはいつれ
乃所か似たりけん我もまた

義朝乃心に似たり
あき乃風

不破

秋風や藪も畠も
不破の関

大垣に泊りける夜は木因か家
をあるじとす武蔵野を出る時
野さらしを心におもひて旅立
けれは

死にもせぬ旅ねの果よ
あきのくれ

桑名本当寺にて

冬牡丹千鳥よ雪乃
ほとゝきす

草乃まくらに夜あかしまだ
ほ乃ぐらき中に濱乃かたに出て

あけぼ乃やしら魚白き事一寸

熱田に詣ッ

社頭大イニ破レ築地ハたふれて
草村にかくるかしこに
縄をはりて小社乃跡をしるし
爰に石をすゑて其
神と名乃るよもぎしのぶ心
乃まゝに生たるぞ中〱に目
出度よりも心とゞまりける

志乃ぶさへ枯て餅かふやどり哉

名護屋に入道乃程諷吟ス

狂句木枯乃身ハ竹齋に似たる哉

草まくら犬もしぐるゝか夜乃聲

遊あんはありきてし

市人よこの笠うらう雪の傘　翁

旅人となれる

馬をさへながむる雪乃旦哉

海邊に日暮して

海くれて鴨のこゑほのかに白し

爰に草鞋をときかしこに杖をすてゝ旅寝ながらに年の暮ければ

年くれぬ笠きてわらぢはきながら

といひ〳〵も山家にとしを越て

誰が聟ぞ歯朶に餅おふ牛乃年

奈良にいる道のほど

春なれや名もなき山乃薄霞

二月堂に籠りて

水取りや氷乃僧の沓の音

京に登りて三井秋風か鳴滝
乃山家をとふ

梅林

梅白し昨日や鶴を盗まれし

樫乃木乃花にかまはぬ姿かな

伏見西岸寺任口上人にあふて

我衣に伏見乃桃の雫せよ

大津に至る道山路を越て

やま路来て何やらゆかしすみれ草

湖水眺望

辛崎の松は花より朧にて

昼乃休らひとて旅店に腰を懸て

つゝしいけて其陰に干鱈さく女

吟行

菜畠に花見顔なる雀かな

いりまし廿年を経て
故人となりあふ
今二ツ中年活命
さくらゞ
伊豆の国蛭が小嶌乃蕉門に
も去年乃秋ふかくも師走乃頃
我庵をまねし草乃枕乃道流
れ年ふも尾張の國まで踏をし
しあひ来るかゝまで進て

いさゝめに穂麦くらん
くさまくら
此僧ゐけよ告て同道せんする大
顛和尚とも月のはし山近花
志みまいましまるや桂へのおち
せるそ年せんそより其角が方
へ申し付のをしまる
梅に沿て卯の花庵也
かすむとられ

贈杜国子

白けしにはねもく蝶のかたみかな

二たひ桐葉子かもとに有て
今やあつまにくたらんとするに

牡丹蘂ふかくわけ出る
蜂乃名残哉

甲斐乃山中にたちよりて

ゆく駒乃麦に慰むやとりかな

卯月の末いほりにかへりて旅乃
つかれをはらすほとに

なつころもいまた虱をとり
つくさす

後に又酬和乃句
素堂乃跋あり今
略之

泊船集巻之三

芭蕉菴拾遺稿

雒陽　風國撰次

春の部

元日ハ田ごとの日こそこひしけれ

誰聟ぞ歯朶に餅おふうしの年

元日ハひるまで寝してしかられぬ

二日にもぬかりハせじな花の春

三日口を閉て題正月

四日

大津絵の筆のはじめハ何の仏

京ちかくて年をむかへて

こもをきて誰人います花の春

年こえや新年始末五斗下

人もみぬ春や鏡のうらの梅

年〻や猿に着せたる猿の面

蓬莱に聞ばや伊勢の初便

此春ハ伊勢ニ知る人音つれて 便りの花……

若菜

蒟蒻にけふは売かつ若菜哉

風麦亭

春たちてまだ九日の野山哉

梅

網代民部雪堂ニ会

梅の木に猶やどり木や梅の花

山里は万歳おそし梅の花

子良館乃後に梅ありといへど

御子良子乃一もと床し梅乃花

うくひすや乃さしもまき梅乃花

寒さもやゝゆるしなとく乃ふ月と梅

旅のうちて古巣ハ梅になりかはり

かろく来ぬ座敷〳〵の梅柳

梅の香乃つとは乃もる　山路笠

笹もし

そ乃女亭

暖　藤乃奥よのゆめに北乃梅

いの乃蜂下にらまき

ふあもあわるくさま　香之

香や小ほへうまほる四近乃梅乃花

何某彰八郎まのおかりる年

一周忌に父梅丸もとゆかしされ

一葉様乃ふりけり
猶佛ゆめさしぬ鏡乃
程ふかれやうれしく

梅この風になひし一字
あまれりけり也

餞別 東武行

梅若菜まりこの宿乃とろゝ汁

門人何のしみらのくまなさに
馬乃もふをとしたまひて

言の葉の数乃中なる梅の花

梅柳さそ若衆かな女かな

天和乃比乃吟なり

鶯

うくひすや餅に糞する椽の上

鶯や柳乃うしろ藪乃まへ

うくひすを魂にねふるか嬌柳
けふもきのふくらし

椿

鶯乃笠おとしたる椿かな

柳

まれおもに柳乃さかるしはへかな
傘に押分見たる柳かな
八九間空て雨ふる柳かな

雲雀

雲雀なく中の拍子や雉子の声

永き日も囀りたらぬひばりかな

栖去之弁 ―― 畧之
小文庫にみえたり

雲雀より上に休らふ峠かな

雉子

高野にて

父母のしきりに恋し雉子の声

蛇くふと聞けばおそろし雉子の声

つきそん

さらつまに泥おとしてや燕

陽炎

かけろふや柴胡の糸の薄曇

枯芝ややゝかけろふの一二寸

伊賀新大仏之記 [illegible]

丈六に陽炎高し石の上

春雨

不性さやかき起されし春の雨

春雨の木下につたふ清水哉

春雨や蜂の巣つたふ屋ねの漏

紙きぬのぬるともをらん雨の花

花

さゝな都浄瑠璃小歌はやり花

憂てハ方知酒の霊　賀メ入覚ニル銭ノ神一夕

花よ浮世拵酒白く食黒

右二句ハ延宝乃末乃吟なりし

大和乃七草尾村なし

花乃隈謡ふ似あふ旅ねのうれ

すのかとふ汁もなきまゝと猶あれ

ちらゆくも一二の仙首ひきことふ

いろの花咲くふ乃庭ハそのまゝ

書の乃八重桜の料一本

附きそれ乃まゝいひ傳え侍りて

一思ハくれ花守乃子孫也

尼まと乃ゐまを行脚して菅
妹山乃娘りとまゐりよみの
寛ハさこのりみそし峯しハ
このまへ
まゐる重ある明おおの比とよ
いとし艶なる中彼乃神
乃ところあしと人乃れさ
つかし奉よふひつく借れも
稍見え尋ー寛なゆとし神
鞭乃

最中乃桃乃中よりちつさくろ
いつま乃信乃咲ことしとある次
よし野
寛さこの山八月比乃銘ほしを
幸納
しもやなし浮舟乃ふれ乃
山桜
景清も寛え乃後ハ七ミ情

西行像讃

すてはてゝ身ハなきものとおもへども
雪乃ふる日ハ
さむくこそあれ花乃ふる
日ハうかれこそ
すれ

花乃雲鐘ハ上野か浅草か

二月十七日神路山を出るとて
西行乃なみだをしたひ
増賀乃信をかなしむ

裸にハまだ二月のあらし哉

桜をもまつを狂ところませぬう
花ちりぬるをかなしむ
花ちり夜ぬるゝもあはれひ
梅ちるゝ乃

まつの花ハ桜より咲し仕舞けり

駿別

此ころ推よ花よ五器一具

種せすや花のきこえて花見ありし

花を吸蚊なくしとひとり　なさしれ

ちる花やちるも柳と流く琴の塵

この句　琴ト太鼓ト笙ト鉦

繪の賛し

厳冬のんこゝろみなかり　花のさし

其角か曰う事ハ上野ヶ法師を

はなれし花の年の暮ちる迄

花病起の眺望欲画し

一聯二句の格じ　句ゑを呼て句とれ

かなん　七堂　七堂伽藍八重　さくら

宗甘亭

花もと宿下としめ終りぬや竹日雅

明月ハ櫓乃まとゝや谷乃庵
またいくるゝありきのよハ
机々とゝこしあまたハいまし　まかりさと
生前一櫓乃あるへしゝ亦よ
あきハしとひくしして
残々ま賢者乃遺言ごとくなりぬ
さひしさやてむ乃あゝあわれ
あきてなろく

白千洲ぬ書向もあよ仍梅

酒落堂乃記畧之

四方より花吹入て湖乃海　鳰

花吹入て鳰乃うみ

芳野山乃花をみんとて伊賀
乃あよ里旅立ちけれハ尾
紗乃杜国を同行あして笠に
とめて檜乃木笠乃書に戯
しまゝして

芳野まて桜見せう檜乃木笠

さ毎し乃宇おゐてもえし桜かな

詩句故郷とあるなるへし

山さくら尾崎くもの花ハ崎も川

しら〳〵ハ花乃上なる月夜かな

う〳〵乃花

詞きこえ〳〵ハあり

四ツ

ごさ乃ちるとぬ花や人かれ

酒乃ミかきる人乃縹手

月花もなくて酒飲獨かな

三歌〳〵乃圖

月花乃色やまと杖まくら

山崎宗

山崎き也宇治乃燈炉かな時

ほろ〳〵と山吹ちる乎の瀧乃音

涅槃

ねはん繪や獣も合する珠数
乃音

いせんして
禅のなやおもひも掛て涅槃像

当別

鮎乃なれし魚送る別かれ

蛙

古池や蛙飛込水乃音

二月吉日もえ足揃ひ

剃髪入醫門をかきて

きつむ手ふ病のそこまで
こらへてしら

菩提山

此山乃かなしさつけよ薢ほり

大和行脚乃とき
たんば市とかやいふ所にて
日乃暮かゝりけるに藤乃咲
けるを見て

草臥て宿かる比や藤乃花

苔清水

凍解て筆に汲干す清水かな

上巳

青柳の泥にしたるゝ塩干かな

草庵に桃さくらあり門人に
其角嵐雪あり

両乃手に桃と桜や草乃餅

深川｜乃草庵を
おくのほそみちに

草乃戸も住かはる世や雛乃家

悼只丸

[illegible]
芭蕉

猫乃こひ

猫乃恋やむとき閨乃朧月

麦飯にやつるゝ恋か猫のつま

蝶

蝶乃飛ばかり野中乃日影かな

起よおき　我友にせんぬる胡蝶

蜆子の賛

白魚や黒き目を明く法の網

奈良にて故人に別る

二俣に別れ初けり鹿の角

二見の圖を拝見侍りし

うたかふな潮の華も浦の春

いせ神楽にて

何の木の花とも志らすにほひかな

題しらす

木曽の情雪や生ぬく春の草

おとろひや歯にくひ当し海苔乃砂

雀子と声し鳴かはす鼠乃巣

大比枝やしをひきすてし一このたとへ

此句ハ翁乃吟なるよしある人ゟ
きこえぬ実否ハしらす

しゝしめ

扂細し相撲とる草の雨露

相撲とり草ハ芝草にて其花の
弱かるへしと其事に入ぬ秋の句なるや

春

行春を近江乃人とおしみける

行春や鳥啼魚乃目ハなみた

此句乃詞書
細道にあり

梅ヶ香や漂流不流　黒木売人

漂流不流トハ佐渡ノ信言ナリ

道艸ヲ取ルト云フ　貞秀語ル

廿白翁之[illegible]

廿春も猿之郎ヶ子野山　翁

伊賀ノ

猿三郎トハ伊賀人ニテ小田原相談ト云フ

泊船集巻之三

芭蕉菴拾遺稿

洛陽　風國撰次

夏の部

山崎宗鑑の旧跡

有かたきすかたをかまん杜若

郭公

須广乃蜑の矢さきに鳴や郭公

此詞書ハ須磨紀行に見え侍る是ハ須磨の蜑乃小鳥を追とて矢を放ちけるを源平のむかしもおもひよせし吟也 [illegible]

郭公正月ハ梅乃花咲けり

清く聞ん耳に香焼て郭公

那須野乃原にて

野を横に馬引むけよ蜀魂

子規まねくか麦のむら尾花

ほとゝきす大竹藪を漏る月夜

杜鵑声横たふや水の上

郭公なくなく飛ぞいそがはし

烏賊売乃声まぎらはし子規

木がくれて茶摘も聞や子規

京にても京なつかしや子規

ある人乃一周忌に

杜鵑鳴音や古き硯箱

子規啼くや五尺乃あやめ草

更衣

ひとつ脱てうしろにおひぬ衣かへ

家来て見よ只一葉は一葉かな

あさ野にハ

一葉を一ツちりて

あやまりぬ

[illegible]

灌佛乃日に生れあふ鹿乃子かな

笋

竹乃子や稚き時乃繪乃すさひ

牡丹

宮しらぬ露や牡丹乃花乃蜜

和━━乃花

卯乃花やくゝむ柳は及ひこし

行ゝめる

暮乃葉むで落るより飛螢

見しゆめを来し乃螢や花の宿

たゝみるゆめや船頭解こし

おもかつりな

風薫

丈山乃像

風薫る羽織は襟もつくろはず

さし汐や風乃薫乃地相拍子

小倉山

秋杉をほめてしや風乃世山る　者

落柿舎

柚乃はなもむかしをしのぶ料理乃間

おもしろく

あり明や色紙まくれし壁のあと

二句乃時月おもしろきや

凡

我もりが似寺二ッはなれし

上嵯峨大堰の

しハ門人ミ道ミ老たるし

秋露をまかれて浮風の去

若しつまりと一應な風のさはき
ろのもあさきもつゝき風のむし
風乃は雲ひとふよや蓮華野
柳こり片荷ハ涼し初真桑
此内らし名の仏あり
市乃夢子之ゆ
ひさ
蒹流ひ入て
山陰や身をやしなはん瓜畠

初真桑たてにやきらん輪に切ん
此句ハ酒田にて乃吟なり
つゝき近乃客をたゝし
四つにやたゝん輪にや
きらんと
あやまりしるゝなり

五月雨
日乃道や葵傾くさつき雨

さみたれを集めて早し㝡上川

大井川水出て嶋田

塚本氏乃もとにとまりて

さみたれ乃空吹おとせ大井川

兼て耳驚したる

二堂開帳す

五月雨乃ふり残してや光堂

五月雨や蚕わつらふ桑のはたけ

もな生て容顔青し

五月雨はかくれぬものやせたのはし

露流て中作る

五月雨耳鳰乃浮巣を見に行ん

なつこひ

ちさハまし青葉かくのみはひけ

こしハ鳥田こし乃咲けし

七日羽黒山よこゆめて

鶴の里よもる重行亭

めつらしや山をいて羽の初なすひ

ひるの浦

ひるの浦よひるねせしみ象乃山

あつしほとや湯殿こゆるぬ風もなん

ひる海の的かや米いまち涼し

あきれ

粽

粽ゆふかた手にはさむ額髪　如春

おもひ乃まきとし　一條にハ
あまたむまいも乃とし　去年ら
積てハ乃ちまきさ乃し　なぬ
笑ふことし乃ふちしとし乃
あやめ草細にむまきん　嘉隆乃緒

田うゑ

奥刕志ら河乃関こえし
風流乃はしめや奥乃田うゑうた
田一枚うゑて立さる柳かな
竹夜目花に瀬ゝしとて飛泉之鵜舟　翁
と云句に入集せられしを見て　是ハ
伊丹の句まし　前乃句とハあまりに

畫賛

ひや〳〵と壁をふまへて昼寝哉

晋乃渕ぬるさうや宮

象潟や雨に西施かねぶの華や

象のおろ

月山にて

雲乃嶺いくつ崩て月の山

大津丹野亭

ひら〳〵とあぐる扇や雲乃峰

蓮乃香を目にかよはすや面乃鼻

丹野ハ能太夫にして

かくハ申されし

湖やあつさをおしむ雲乃峰

大津湖仙ニて

水鶏

此宿ハ水鶏もしらぬ扉哉

露川かへさやましを
おくりして共よくの露も

水鶏啼と人のいへはや佐屋泊

蝉

頓て死ぬけしきもみえず蝉乃聲

閑さや岩にしみ入蝉の聲

稲葉山

撞鐘もひゞくやうなり蝉乃聲

夕顔

夕顔や酔て顔出す窓の穴
夕顔にしりんこ中もつて
あそびけり
夕顔の白き夜の後架に紙燭とりて
是ハ天和の比の句なり

涼

川中の根木によする涼哉
飯あふぐ嚊がちさうや夕涼

涼しさや海に入たる最上川

四条の川原すゞみとし
夕月夜のころより有明
過る比まで川中に床
をならべて夜すがら
酒のみものくひあそぶ女ハ
帯のむすびめいかめしく
羽織ながう着なして
法師老人ともに交り桶やかぢや

せん第子子まてしと招
ゆかりしらひ乃しる
さきこうれ都かたよ
なぐし
川風や薄かききたる
夕すゝみ
閑居のおもむきある人の
かとへもとして
涼しさはさし圖にみゆる
すまゐかな

淵庵不玉亭
あつみ山や吹浦かけて夕涼み
尾花澤清風宅
すゞしさを我宿にしてねまる也
腰長
腰長や鶴脛ぬれて海涼し

象潟

象潟乃雨也西施かねふの合歓の花

西行桜　西行法師

象潟乃桜ハなミに埋れて
はな乃上こく蜑の舩

花乃上漕とよミまし
其古木の桜といひまし蚶
満寺乃きさかたへ隠れて陰
波を浸せる夕晴ハ殊に涼の趣八

夕晴や桜に涼む波乃花

十八楼乃記　落日低く人之笑

此あたり目に見ゆるものハ
皆涼し

野明亭

さしきに繍ようつし泉
風瀑を駿別ス嵯峨乃什
ゑる道をハ小貴乃伊中也すゞ凉め

泊中

雪芝亭

涼しさや直に野松乃枝乃形

唐破風入日や薄き夕涼ミ

詞書略す

秣負人を枝折乃夏野哉

りつきん人をもたらさへんとも

此句ハ道指乃野ぶら乃比し

うちつけの角ぬけりふよ　去酉胴らん

あかし乃夜泊

蛸壺やはかなき夢を夏の月

郭公聞つゝやゝ嶋一ッ　ちてま

月をさへ見ても扣きさきや須磨のね

きぬ衣の何ぬけなき届し

中古なりし名八あると今集にありけるかな

正成之像

鉄肝石心叶人の情

ちりしこそ平ぅ風ちらしや楠乃露

竹酔日

嫁ゝきとも竹植る日ハ世義　とめちて

岐阜にて

おもしろうてやがてかなしき鵜舟哉

名にあふ鵜飼といふ
ものを見侍らんとて暮
掛ていざなひ申されしに
人々稲葉山の木陰に席を
まうけ盃を挙て

又やたぐひ長良乃川乃鮎鱠

又ハ[illegible]

たしゝうき雲しぬ
蓬風馬乃たゞよひて
かくしれと

するがの路

駿河路やはな橘も茶乃にほひ

冨士

目にかゝる時やことさら五月不二

清瀧

清瀧や波にちりこむ青松葉

波に塵なしとあるを妙なるは翁の遺言し

清瀧乃句をしるしやいてなんと

あらし八野明の川さきさきのおろ

あまり細道はそみかやてしとおい
おやまりがきらし

嵐山

六月や峯に雲置嵐山

那須乃温泉

湯をむすぶ誓も同じ石清水

逢龍尚舎

もの乃名を先とふ芦の若葉哉

許六木曽路におもむくとて

旅人の心にも似よ椎の花

うき人の旅にもならへ木曽の蠅

岐阜山

城あとや古井の清水先問む

尾刕に入の吟とかや

世に旅に代かく小田の行もとり

盤斎うしろむきの像に賛

團扇もてあふかん人のうしろつき

奥刕かさしま

笠嶋やいつこ五月のぬかり道

出羽の最上を過て

眉掃を面影にして紅粉の花

千子が身まかりけるを
きゝてみのより去来かもとへ
かきつかはし侍る
なき人乃小袖も今や土用干

幻住菴　記ハ猿蓑ニアリ

詞書 元国やむかしの国ゐ椎まくそことしの夏のうちたのしむ

先たのむ椎乃木もあり夏木立

佛頂禅師の菴をとふらひて
木つゝきも菴ハやふらす夏木立

留別

人々川さきまて
送りて餞別乃句を云
其かへし
麦乃穂を便りにつかむ別れ哉

このへんにて
うき我をさひしからせよかんこ鳥

詞ことハもくしめ

世乃人乃見付ぬ花や軒の栗

加州小松ニ別るゝ身に

もの書て扇子引さく名残哉

武隈乃松見せ申せ遅桜と
挙白と云者餞別しけれハ

桜より松ハ二木を三月越

奥州高館にて

夏草や兵ともの夢乃跡

最上川

あつき日を海に入たり最上川

あちさゐ

あちさいや藪を小庭の別座敷

二子軒

薮椿八葉かえ葉に

青葉しれ月の雫椿くや

薮生れ

石乃香やゝる草赤く露暑

嵐夜已百亭

や千里かんあふさの杖に

なる樽まて

鰹

鎌倉を生て出けん初鰹

鰹売いかなる人を酔すらん

草舎乃畫讃に

芭蕉さへ荒れ葉破てや破し家

芳葉集十に
あきつ住ひや
下よりは
聲はすは
おこしあやし
とあり

蚊火屋
飼屋
鹿火屋

篠波曰
田を守る人
山田の縁子
鹿ヲ追ヒ
別ありて
縁の内ニ煙ヲ立テ

題しらず

櫻乃つぼむやむかう蝶の世雨

とびこみしくかし此の句し

這ものいるこの下の螢の　支郎

篠乃露落ることのなかりけり

此句乃もしのゝ錢乃孫子

あきも今かりしかぬ

秋宵ハ数乃ちいさきも馳走かな

さんこかと標や兩乃具足

昭説ハ飼屋ハ田舎にて
蛙の多く集ルを

上諸説
六百番歌会

かまくらしかまきこの上の鷄の腸

夜乃おもや山明て湖ひやし持

うこきや行乃子鶏なきな鳴

水濁りや鯛ハあまこしく

青きしや草餅の穂かも

闇の夜や巣をまどはしてなく鳥

大津木節亭

秋ちかき人乃寝しや四五尺

泊船集巻之四

芭蕉菴拾遺稿

維陽 風國撰次

秋乃部

越後の出高田医師何
之宿にして

薬園にいつれの花を草枕

初秋やたゝみなからの蚊屋の夜着

文月の六日も常の夜にハ似ず

七夕

合歓の木の葉ごしもいとへ星の影

出雲さきにて

荒海や佐渡によこたふ天の河

弔初秋七日雨星

元禄六文月七日の夜風
雲天河をひたして白浪銀
河の岸をあらひて
烏鵲も橋杭をながされ一葉
梶をふきをれて二星適
逢形なくしてその夜の屯し
猶なぐさめんも待かたし

野小町石上寺に詣ふて日暮ぬ寺に
とまらんとて此寺に遍昭有
けると聞て言ひやるに
後撰
岩の上に旅寝をすれはいと寒し
苔の衣を我にかさなむ
遍照返し
世をそむく苔の衣はたゝひとへ
かさねはうとし いさふたり寝ん

一燈かくし法華經を讀誦
小町の奇を吟ずる人
あまた見えしよりて此二首
を探て両景をかくれ乞ふ
然ととて
小町か哥
ころか年聖の旅寝やこれ此上
遍昭の哥
せくよ年かさね〇さらは絹合羽（イ紙）
杉風

野童亭
七夕や秋をさたむる夜のはしめ　芭
素堂乃母七十餘りて七とし
乃秋七月七日に婦まゐる
万葉七種をもて題として
是につゞる者七人姑結
縁に婦妻をし名まさ七婆文乃
とゞいけ年　ずゑ姑

七株乃萩乃ちとせや星の秋

萩　萩
植たる松ゆかし

志賀しま笠や小室婦し
萩なお

萩をうや一房をやちとせ山乃谷
この月結の名ぞ星の光し

まと
頼も一本ハやちとせ萩の
上の札にもおさえて待つあり
わすれぬ
笑の記ハ竿ありと

小萩ちる連まけて花小園
こさのつま

——露をこぼさぬ萩のうねりかな

きゝやうの花

ひよろ／＼と猶露けしや

をみなへし

家ハみな杖に——しら髪の墓参り

付句家書

續さることはありぬ

魂まつり

かし乃[illegible]

艶坂のゆのかやらい川乃まつり

玉まつりハも焼塲乃始りの事
尺素真の分段の分るゝと
きこえし
数以ゝ好ニ分とふおあらして包参り
あ作ゝの序
閑開ー
又ハ支那ニのふ文庫ニ書しぬ

あさくの序や篆ハ鎖おちまき門乃垣
嵐雪ニの繪書して贊
乃えゝ以連尓し
芭蕉ハ下よ此書きく
あくにし也
揺かるゝ出る〳〵部分よ
没りし三為でゐ傾たる年
芭蕉ハ酒よりむ好み其為字

何さこの伴に秋ハめしくふ　四方のをな
此句あるは三明し　くわ集にて
見えたり

稲妻

あの雲ハいなつまを待便り
かな

いなつまや闇乃かたゆく
五位乃こゑ

寄ニ妻下ニ

いなつまを手にとる闇乃紙燭
かな

稲妻にさとらぬ人乃貴
さよ

此句乃詞書　芭蕉の集に
みえたり

髑髏繪賛に

稲つまや顔乃ところか
薄乃穂

これ乃句詞書ハ續さる下
見えたり

秋風

あか〳〵と日ハ難面も秋の風

秋風乃吹とも青し栗乃いが

那谷乃観音ニて

石山乃石よりしろし秋のかせ

加賀山中桃妖ニ名をいひて
翁とし

桃乃木乃其葉ちらすな秋の風

一笑といふ者此道に好る名乃
ほのほの聞えて世に
知人も侍りしに去年の
冬早世したりとて其兄追
善を催すに

塚も動け我泣声ハ
あきの風

牛部屋に蚊の声よはし
あきの風

庵室之銘

人乃短をいふ事
なかれ
己が長をとく事なかれ

物いへハ唇寒し秋の風

西東あはれさひしき秋の風

去来ハ妹千子いせ乃紀行書し深川へ送りける
そのおくに翁甚おく
書付けまかりける

月

大曽根乃成就院まで
あまた客あるなかくその郷を
こゝの月
むかしつ道乃集まり居る
五文字を何事乃とはありぬ

更科姨捨之辨 今界之 小文庫ニ知らく

俤や姨ひとりなく月の友

いさよひもまたさらしなの
郡かな

元禄二年つるかの湊に月を
みて氣比乃明神に詣遊行上人乃古
例をきく

月清し遊行のもてる砂の上

雲折く人を休る月見かな

座頭かと人に見られて月見哉

見る影やまた片なりも宵月夜
むかし八阿叟宗房と名乗を
まいらせし比乃吟なりとぞ
維舟子えらひ作りなり

名月は二つ過ても瀬田の月

名月や門にさしくる潮かしら

夜掛てぬる月黒岩に涼かな(?)
常陸へまかりける船中
[illegible]

明ほのや外七夜もこゝろ勝(?)

堅田十六夜の辨 二句 今[illegible] 小文庫

鎖あけて月さし入よ浮御堂

安〱と出ていさよふ月の雲

[illegible]ハ四角な影を窓の月

侘てすめ月侘斎か[illegible]を嫁して
乙和乃比乃句し

月さひよ明智か妻の咄せん

此句の詞書勧進帳ニ見えたり

[illegible]のつみも月や其ふしあらし 坊(?)

此句乃そしりは 小文庫ニ見えたり

名月や池をめくりて夜もすから

此句乃説 初[illegible]集にくはし

寺に寝て誠顔なる月見かな

此句ハ鹿島に詣でし

をりの事にて根本寺にて

よめるよし

三ヶ月の地を朧なりける島

此句ハ三ヶ月の記ありと

寄りて

深川秋五本松といふ所にて

舟をさして

川上とこの川下と月の友

十六夜ハわつかに闇のはしめかな

敦賀にて

名月や北国日和定なき

浅水のはしを渡る時俗

あさうつといふ清少納言

の橋はとあるの一条あさ

むつのとかゝれたるなり

あさむつや月見の旅の明はなれ

玉江
月見せよ玉江の芦を刈ぬさき
湯尾
月に名をつゝみかねてやいもの神
燧山
義仲の寝覚の山か月悲し

浜
月のみか雨に相撲もなかりけり
こよひ誰よし野の月も十六里
来てみれはとこよ風の月のかけ
いさゝひや海老するほとの雪かなゝ
正秀亭初会興行
月代や膝に手を置宵の宿

九たひ起ても月のなゝつかな

大坂畦止亭

月下ニ送児

月澄や狐こはかる児の供

名月や池をめくりて夜もすから

義仲寺ニて

三井寺の門たゝかはやけふの月

橋桁のしのふは月の名残かな

いさよひハわつかに闇のはしめかな

三ヶ月や蕣の夕へつほむらん

此句ハ延宝のすゑ

天和のはしめの吟也

入月の跡ハ机の四隅かな

東順身まかりしを傳へきゝて

其角か深き歎をとふらひて

其角亭にて

えりをとひらくの八ハ雨よし宿あり
但此中にハ梅花てふもよしとし
雪なともよしとし見られ孤也の
徳あり

其まゝ下月も無宿 二 但此
いろ山中にあるへし 二句
名月に晦日とれ霧や田八ツあり
名月乃花もりとらへて棉畠

虫

色ゝ音をなして虫乃声

聴聞

叢虫乃音を聞にまきよ
秋の夜くれ乃集よるいかにも体
萩ゝお書あるとも見ハ深川
乃萩ちりまく

蜻蛉やとりつきかねし草の上

[illegible]

海士の屋は小海老にまじるいとゞ哉

胡蝶にもならで秋ふる菜虫哉

ゐのしゝの床にも入やきりくす

白髪ぬく枕の下やきりくす

加賀小松と云處多田の神社に宝物として実盛か菊からくさの甲同しく錦のきれ有と也あるしの情

むさんやな甲の下のきりくす

ゑる

田中に池の萩ありけし

刈株や早稲かりしれ

田　鳴か吉う

隠田子し

病雁の夜さむに落て旅ねの哉

桐の木に鶉なくなる塀の内

鷹の目も今や暮ぬと鳴鶉

老の名のありともしらで四十から

草の實

草いろ〳〵おの〳〵花の手柄かな

美濃如水別墅

こもりゐて木の實草の實ひろはゞや

こゝろさし
舩にちる帆となる風のさゝなみ
けふ西の舩なりとある人
ゆきをし　宗舟かしこまて
せみさよ野寺して盥に雨を聞　松井

菜

菜の露落ひかくかゆめの花

いさゝかのいほまこのとなりは　乃る草
稲こまかの嫁もめて菊菜の芽し
腰かけゝるまるとやのまよ草花の　つほとゝれ
草の香や庭よ切ある　籠の底
又変の海過や野ゝみれは　乃菜

琴箱や古物店乃背戸乃菊

李白ハ玄宗乃枕をうつし
いつはりぬ

草の戸や日くれてくれし菊乃酒

李白ハ山別ハ酒をのし雅にえし

翁く 菊わりし晴乃夜るの いとく

草菴乃雨

起あかる菊ほのか也水のあと

加州山中 寛陽

山中や菊はたをらぬ湯乃にほひ

菊乃花咲や石屋乃石乃間

木因亭

かくれ家や月と菊とに田三反

むしの重陽

菊乃香や奈良にハ古き仏達

くらかり峠にて

菊乃香にくらかり登る節句かな

花柳亭

きやくと音すれ月も

きかりし重乃菊

難波その亭

白菊乃月をちらし見たる座も なかし

北向はし哥仙あり

芙蓉介

きりの母乃見えしと芙蓉の花の露

画一幅

枝ぶりの月よしゝに向る芙蓉かな

木曾路にて

椿や命をとりて世をゆるつ

ほうづき

鬼灯は實も葉もからももみぢかな

畫賛

雞頭や雁乃来る時尚あかし

夜さりし

深川夜遊

青くてもあるべきものをたうがらし

此句にて哥仙あり深川集に見えたり

芭蕉庵

草の戸をしれや穂蓼にたうがらし

伊賀山中　二句

つゞくりもはてなし坂やさみだれ　山路ゆき

松茸やしらぬ木の葉のへばり付

ならにて

ひいとなく尻声かなし夜の鹿

野分

猪もともに吹るゝ野分かな

秋のくれとは

枯枝に烏のとまりけり秋の暮

こちらむけ我もさびしき秋のくれ

此句は雲竹がうしろむきの

像に賛のぞまれ

書て送る

人声や此道かへる秋のくれ

此道や行人なしに秋のくれ

大坂清水茶店

四ラ卯たはるゝつよし

松風の軒をめくりて秋くれぬ

早稲の香やわけ入右ハありそ海

同行曽良に別るゝとて

けふよりや書付消ん笠の露

一家に遊女も寝たり萩と月

庭掃て出はや寺にちる柳

此二句詞書ハ細道ニ有

ぞうあくれ侘れいかしぬ

ある艸庵にてよまれし

秋すゝし手ことにむけや瓜茄 まくは

越前のつるかの濱にて

さひしさや須磨にかちたる浦の秋

守栄院

門に入れば蘇鉄に蘭のにほひかな

悼去居嵐蘭

文ハ嵐及日記未完在芭蕉木ニ出

秋風に折れてかなしき桑の杖

初七日詣墓

みしやその七日は墓の三ケ月

是月三日身まかりし

野ゝ宮

野ゝ宮の苔表に蔦もなかりけり

鳴海知足亭

よき家や雀よろこぶ背戸の秋

画讃

西行の草鞋かゝれ松の露

住よしの市

升かふて分別かはる月見かな

車庸亭

面白き秋の朝寝や亭主ぶり

草菴にてあつまりし

栗稗にまづしくもあらず草の菴

元禄二とせの秋とかや
大垣よりいせのせんくうを
をがまんとて侍りし途の
中にておくりける人に
申侍る句
さゝめかれぬるとかくれし秋の
内宮はことおさまりて下宮の
せんくうおがみ侍りし

たふとさにみなおしあひぬ御遷宮

女木沢桐奚興行

秋もはやはらつく雨に月の形

関の住素牛何かし大垣の旅店を訪れ侍りしにかのふちしろみさかといひけん花は宗祇のむかしに匂ひて

藤の実は俳諧にせん花の跡

きぬた

猿引は猿の小袖をきぬたかな

入麪の下たきたつる夜寒かな

題しらす

夕顔や秋はいろいろの瓢かな

おくられつ送りつ果ハ木曽の秋

松茸やまつは数ある秋の露

むしきけちてぬ盛さく　ちゑまよう

稲まくらん茶乃木帛や迹　[illegible]

秋乃和と手扇　あるそま久女

菜乃ね大根乃外さくら　ちよし

梧乃実ちるむしくれ羽音や　初あし

此秋ハなんて年よる雲に鳥　翁

山ハき風蜜柑乃色乃黄ばミたりし

暮秋乃ちりしまき

桐動く秋乃終りや蔦乃霜

行秋乃猶たのもしや青蜜柑

行秋やよき衣着る栗乃いが

秋もはやはらつく雨尓月の形

行秋や身尓引まとふ三布蒲團

秋深き隣ハ何をする人ぞ

懐老杜

髭風を吹て暮秋歎ずるハ誰が子ぞ

此句ハ延宝天和乃あいだの流行なり

——

泊船集巻之五

芭蕉菴拾遺稿

維陽　風國撰次

冬之部

島田塚本氏に詠草有

馬かたはしらしゝくれの大井川

初しくれ猿も小蓑をほしけなり

ゐふも人も年よれ初しくれ

嶋田の宿にて

宿かりて名を名乗らするしくれ哉

不二

一尾根ハしくるゝ雲かふしのゆき

岡里にまかる

しくるゝや田のあらかぶの黒むほど

旅人と我名よばれん初時雨

はまつる雨の傍はちかし

世にふるもさらに宗祇のやどりかな

此句五文字を世の中と
旅日記にハしるされける写本
のあやまりなるべし此しくれの説

一　雪

深川　二ツ橋架りける比

初雪や掛かゝりたるはしの上

初雪や水仙乃葉乃たはむまで

大佛造営ところ〳〵勧進に

初雪やいつ大佛乃柱立

初雪や聖小僧乃笈の色

初雪や幸ひ庵にまかりある

深川　八貧　文八今宵

米買に雪乃袋や投頭巾

深川　夜雪

酒飲ばいとゞ寝られぬ夜の雪

對友人

君火をたけよきもの見せむ雪丸げ

兎も角もならでや雪乃枯尾花

ひごろにくき烏も雪乃朝哉

熱田御造宮

とぎなほす鏡も清し雪の花

あらん付て雪見にゆかん紙子なる

雪ちるやほやのすゝきの刈残し 信なりなる

雪と雪こよひ師走乃名月か

此句は尾張にて中あたり

かゞめくし水かゝるもて

いざさらば雪見にころぶ所まで

山中子共とあそびて

雪乃中は兎乃皮の髭つくれ

小町画賛

貴さや雪降らぬ日も蓑と笠

信濃路を過るに

雪ちるや穂屋の薄の刈残し

夜着ハ重し呉天に雪を見るあらん

此句ハ延宝乃比乃吟なるべし

さびし

さびし乃身ハ竹斜似たる哉

道乃記ニハ狂句とし

ありしを後ニ狂句乃文字を

も嫌ふ絶ひしより狂句と

巻頭として五哥仙有之乃

同と云説も　なるべし

風や頼ハさま痛かし人乃頼

木からしに岩吹とかる杉間哉

三州　萓流亭

木からしにあまりて松木かしや冬住居

三ノ　耕雲別雞

木からしに包ひやはしれ海り哉

冬籠

冬こもり里まこもりこそん
あらたしう

志賀　隠士ねさる人は
中ーをさし

花桜あらしの乃冬こもり

金屏に書乃梅見や冬こもり

千川亭

折ゝは伴ひ来んてや冬籠り

贈酒堂　詞書市乃巻ニ入

難波津や田ふ一の婦さし冬こもり

深川冬夜乃感

櫓乃声波をうつて腸氷る夜や涙

と和乃氏乃由し

落葉

留守乃まにあれたる神乃落葉哉

あれ權現よし

宮人よ我名をちらせ落葉川

明照寺よし

百年乃氣色を庭の落葉かな

おりし みゆる涙やそめしきるぬめら

夷講

恵ひす講酢売に袴きせけり

振売の雁あはれなり 芭蕉

御命講

御命講や油のやうな酒五升

大根引

鞍壺に小坊主乗るや大根引

埋火

埋火や壁には客の影ぼうし

追善に

埋火もき遊や泪乃煮ゆる音

水仙

水仙や白き障子乃とも移り

其匂ひ桃より白し水仙花

寒菊

寒菊や粉糠乃かゝる臼乃端

大津にて　卯

三尺乃山も嵐乃木乃葉哉

嵐雪かゑかきし尓

霜乃後撫子咲る火桶哉

口切

支梁亭し

口切ハ境乃庵こそゆかしけれ

柊しらぬや花と老も鬢乃霜

あられ

いのえし

おき音や雹の檜乃木うち

雛にも琵琶あそ軒のあられかな

ふく汁

あら何ともなきのふハ過てふくと汁

江戸三吟乃句也

麩田干し

あまり来ぬ鰒(フグ)するまでし 七里とと

西行の歌の心をいかにとつゞる

山家集乃題ハ独ぬ

一露もこぼさぬ菊乃氷かな

寐覚は松風の里
よびつぎは夜明て
から笠寺は雨の降日

星崎

星崎の闇を見よとや啼千鳥

此句尾張熱田中村七左衛門所にて
星崎や闇を見よとて ともきこえぬ

いらこ崎

鷹ひとつ見付てうれしいらこ崎

ある人のもとにて

麦はえてよきかくれ家や畠村

訪杜国紀行

すさましや馬上に氷る影法師

[illegible]

[illegible]

旅宿

こを焼て手拭あふる寒さかな

杜人と吉田乃驛しやとし

寒けれど二人旅ねぞたのもしき

[illegible]

其後越人くゝり来たれ向
二人見し雪ハ今年も
ふりけるかの

霜
人乃蓑をき川ねし
きれなしこてあまてあまてまし乃霜乃番
以何發日記ニハ逢杖心とて子おろき
みくし　髭ひきあき乃とあつぬ書あ
やまりなるへし
葛乃葉乃おもて見せけり今朝の霜

霜の後葎なりして
花こそかれて京をとこほち菜乃種

病中
葉乃色もきえても霜乃まつられ

探梅　防川亭
香をさくる梅に家見る軒ちかれ
来りそわし宅も入さくまで梅標

大通菴乃主道圓士芳
名かはりて先しきまゝ年
まてえん事までききあれ
法たす其の日まで来しさて初冬
一夜乃霜と降ぬ今月八日
ひとめくめにあとや化をとふらひ
きこらし

其くらき見まや枯木乃枝のぬ

風まき

若菜ひとつ初もて猿ね哉

翁のこの霜月初の日
深川の旧草にあひ新めて

都もて神も猿なり乃日数哉

きちゑみ女

長嘯の墓もめくるか鉢たゝき

納豆きる音しはしまて鉢たゝき

年わすれ

古川にこびて目立つ年わすれ　拙婦羽紅

[illegible]年の渡世なん

乙州の新宅にて

人に家をかはせて我は年忘

またゑし

某門人の僧

是や世の楪ハまさぬ古格子

楪掃乃説　今昔之小文庫

楪ときゝやくれ竹宿の翁軒

蝶さよハそゝ栩つる大江哉

旅して

蝶ときハ杉のまの尾の庵も

旅して見んや浮巷蝶乃蝶〳〵ひ

題しらす

〳〵鮭も元也乃之暖之の中

月雪乃黒に割みこみ入

馬ぼく〳〵我を絵にみる枯野哉

この句ゐる野ゝなとも ある人もあれ

貪山乃釜霜に啼声寒し

永若く偃風に咽ぶかわ

右之句八次韻乃比乃吟なれども

ほつゝの如旅乃わんやさゝ出雁

枯尾花集之序ニ其角云
是そ慈鎮和尚
旅の世ニ又旅寝して
草枕・
夢の中にも
夢を見るかなとよまれしを思ひ合せて侍る

毛衣につゝみてぬくし鴨の足

面白し雪にやならん冬の雨

苅株や[illegible]輪乃田井の初氷

冬[illegible]の稲あるなき人るときさうし

とし忘れ

月白き師走は子路か寝覚かな

うつれ鳥師走乃海乃鳰(カイツブリ)

何にこの師走の市にゆくからす

もして[illegible]くれ

さゝこのみとしのくれ

めでたき人の數にもいらん老のくれ

分別の底たゝきけり年のくれ

盗人はあのて捜もあからしく他の
月雪も乃きそうくとりのなれ
垢も鯛乃歯くふりさも通乃尻
魚ハうかんハさつきとしのれ
蛤乃生るらハあまとしの筆も
婦さをもや麟乃娘ハおとしの筆も
又年の帝線香買てもとやす
世帯あるハ乃来れも風雅師匠かれ

帯まハを雀乃あまり梅かきもちかれ
霜ハ日もここけりまちの餅のね

病中乃吟

猿にかんて枯木ハ枯野の花酒
死ぬるハ枯野あかに入にけり

雑句

あさよさを誰まつしまそ

こゝまてわ

てハ路通かたかたかりの

問ひけりと書もしぬ

杖つき坂

かちならハ杖つき坂の落馬かな

云ひのちら此芭蕉植ゑりけるに

李下拙芋語芭蕉

芭蕉植て先悪む荻の二葉かな

此二句深川杉枝にミえ跡アリ

泊船集巻之六

洛風國撰

机西にてみのかきみの作れり
るきれた住吉にて於いろう
て進加とやしぬ家めく婦
しとめよ
すて

一とせに一度つまるゝ菜づなかな　芭蕉

畑のへ頭巾呼なる若菜つミ　其角

若菜つミ敷ねやなしき小俵　去来

若菜草袖をるてのましや鶴鳥　野坡

踏分る雪ハ勤くハ若菜哉　惟然

摘立ぬ方もなし鬘の若菜哉　風国

若菜つむあとハ木をわる白雪かな　越人

桜

おのれよさぬおそぬに桜かなちらしハちれ　惟然

宮の字ハらつゝに桜乃くもりかな　越中井なみ　林紀

言とへいまゝあそひ尽しぬに桜の花　おんところ　雨六

夕月におのれ石原に桜の花　風水

桜乃花もなしおかし小僧　さこの　為有

みちのくの松木も咲るひとのかゝ桜乃花　難波　金鼎

鶯

うぐひすや風ちり行く闇の階　其角

鶯ハ女乃よ乃る若菜かな　文喜

鶯よ目内ハまうとふるしかく　あんこ　朱拙

鶯や梅乃中をこ枝つたふ　おかく　幽宗

鶯のあたゝ鳴てまゝくもりかな　林紀

鶯乃鳴あしかる菜畑かな　風水

如月之

葉や嵐を掛りし庵る花桜　ミハリ 露川

柳

ふんはりと日乃暮ておる柳かな　野坡

糸柳堂よりひいて見る雄波への杉　三ノ 一可吟

稲妻りて折しまの乃ちる花ハさし　三ノ関 東鷗

鶯乃賀人庭を乗りよる柳かな　風雪

大空なりけりの雲ハうれて
世つぎ乃松と里人のこゑり　宿 桑女

けふの乃そしや雲れ花咲て里

其の桜をたもしう風や
修なしやをしうる
いろ乃かわり　山嵐雪

梅丁

麦ふりし雁ともぬくくられけり　野水

一乃むしおもろくし何万里　荷兮

春

涼しさの大服中よおもしろし　杉風

朱乃元乃天狗も今八涼乃衆　去来

て川なら乃矢さきよもろや山桜　長サキ　卯七

ちりりの花んやなき鼻り　いか　宇鹿

けしやあさきしまて花よ蝶　門　猿雖

鷲乃輪よつましよりや山さくら　尚白

ちる花乃世やろえ柳よ似よ　鋤人

あふきこのや花乃梢乃くるまた　大つ尼　智月

常陸朱拙汁さへ八今乃あらん
なといふ事ーろるよ

もろもろよ影も踊へなまの陰　風吟

とうこもる也般若乃紙乃間　志ま

雛

抱けりやひとふ々雛子乃あまりまわ　イカ万手

むさ乃里よる雛迄て聞ゆるらな　ミノ圓解

雨降て雛思子なり香るつくつめ乃ゆ　鏡筋黒埼 眇去里

とめもなき雲雀の中の山路かな　風也

篁乃一降ろやさ隠し雛子ろれ　イカ道宅

おぼろ月

米魯町ろ春へてへうつる也

淡りし

ませそれつ中よ落その　おぼろ月　志来

圓城寺あまひし

春山へまいりきしも朧月　風也

筆舞伸ちまおぬよ

錦乃巻いつかん鳩方朧月　奥州二本松 惟氏

夜る乃寐もしましきおほろ月　あん二日目　紫道

青闇もおほろにむかしむかしよ　惟然

ひる猫乃ひし／＼魚相てし　ちきんろうせ　水孔

障子あけ明る所しある彼山岸か

尖と見れ花におちつくも猫の魚　あんこト夕　蕉雨

さる魚乃一折やたちさうひ　華年

名主も観て帰りしこてうか　ヨハリ　机下

重之

雛さまし扇におさるや藩乃子　あんこト夕　王ん

つほ海のまよ墨としん桃乃花むかし　小枝

曲水や箕ん浮かれる大名かる　宗角

ひ────も

冷汁乃満貴よさるさき────かき　ヨハリ　和泉

ちらくと見ゆ古宮や南風　林中　好風

夏山ハ八入楓のミとりかな　坂中　嵐青

行暮や墨もあをき夏の影　太峯

山姫の夏を染ても青葉かな　葵竹

この句栗の香の友の
部に書たくえ侍る八
そもし　如

こゑ

聞列し今北きの河もる
早苗とも我いろ里ぞ日数かな　芭蕉

郭公

郭公たとくちつん積をへり　正秀

飛ちんるましの都乃子紀ん　去来

情雲乃名や五加乃子紀ん　李東

住よしを忘れてや乃郭公　難波 諷竹

子紀ん山田乃名も色の流く　越中井浪 浪化

涼まし

船さを乃ひゝく程なき霍公　几雪

吟声ハ我乃への餌食る郭公　さう 物有

とのみんなよこのねもなくぬ月夜かな　来抱

灌佛

灌佛やまもとくたけはとく手詠　汎竹

鳥

くびのべし鵜のむき毛各羽流れかな　浪花

やうしりと知て鳴夕晴ららんとする　杏堂

白鷺の人見付けりや麦の中　らんこ拾珠 慎女

作木の里の書懐

おのゝのの花や水雞の磯鵆　杏字

いとさへ舞名ハ寝るかまやうし　鉢中 比人

川狩をしつとみて狩る鳥の羽か　ミう 嘯風

さつまる暑さ夜の水ゐるみ　浪花

青鷺や世面かのすゝる田うゑとし　正秀

ほたん

一まつハあらんと川をこゆる旨哉　勢中井浪　路健

國乃花よしゝ牡丹のめてゝあさきよ　風国

たけのこ

さゝしいくらも出ぬのちてほとゝきすの枝　うんこ枝雄　曲風

茶も木も羹しきやあみれ　正秀

曲水乃おもしろさゝゝし

浮蔵はゝあさえてはなるのさうれ　去来

松乃尾神ぞう

冷酒ようしも鎮まくまく参ありの　為有

更衣

小坊主乃とよあありきや更衣　ちうあ中津　眠山

子をつれて猫乃身すゝし更衣　三州　白雪

蝶くあるゝ炎へよとあめられ　野坡

直愚上人にわかれし

さつきまで行もなくされなき　大つ　智月

木曽塚にまうで

ちるさくら男あてしきしきてはりかは　武部　玄梅

猪の見るやまかりてはりられ　路健

高館にて

卯の花に兼房見ゆる白毛かな　江戸　曽良

五月雨

さみだれの庵ゆくるや稲ひかり　去来

八幡堤をもる

さみだれや植田の中をかいつぶり　泥足

さみだれは見をさくらまで　月梅　凡兆

さみだれや風つまづれてしのぶ折　京　吾仲

ちまき
幟　粽　ちまきと　なきね　夏畑

ねぢなて鬼乃はらくちまきかな　為有

日限も来ぬのどし幸太乃粽かな　下柄

橘や童子さし除て塀の隙　為札

夜桃もはるを乃そくやらまをき　如行

淀川を里と思ふえのあやめ哉　ふきこ晶　可睦

いろ〳〵の作となりし梟麦の跡　去来

くりあち

夕ぐれはえしてあるや竹の蝶　杏柔

あつさ

石も木も眼にひかるあつさかな　去来

雞乃砂に並ひ喰しまあつさかな　風国

旅行

くさびらにあてゝまゐまつ日の旅　大年

玉ほこし

背負ふ子は江の麦の刈仕まひ　惟然

惟然にわかるゝ

あゆみてはなれぬ山の細道草いきれ　越中今石動　濫吹

惟然にむかへて

たちまちに壌や文むちつかね芙のむら　越中あそえ　拾貝

あつさしく

秋ちかよるもわれの色川　おろしく　路青

夕涼

つまにも憐になる袖や夕涼　太年

酒の肴八奥うしろ涼しの風　いかゞね　花幸

相もるゝして

山門に風とる衣や小商人　鳳嗚

ゑかしまはしもゆくる
ちしこれ　游刀

乳ふしし
こゝろしやまあのは[illegible]の流
[illegible]　素堂

秋

かし小きうし
ねまそし折人もなかりし女郎花　芭蕉

秋さみし
や鷹乃とや毛れさし乃こわ　浪化

おもふとちきゝやしゝも銀ねいさ　長井キ　魯町

あまりかせ
秋風や羽織をまくる小脇指　小枝

釣もりやなくわる頭の
秋の風　正木乃

くし鷲の龍をつまてすゝるや
あまえ乃風　吉中

さゝまゐる金剛山を
あまの風　舍陸

福秋乃ふらを
三一の月の秋や泣ぬや州の上　風必

七夕

秋もまたちらしの花乃ゆかりやまし　特雄

妻恋しや船よりハあかす梅茶乃烟　風之

蜻子　雁　蜻蛉　むかふ　蜻蝎　早稲　粟之雀　薫　虫　萩

白きかれ今しかる蜻蛉かな　大フ　高介

なかれ風まれもかるかし　出羽天童　自性

蔦まて引倒されたる岩乃鳴　うえ二百田　野松

蜻蛉や日よとまりかる穂とまり　うえこ玖珠　頭水

蜻蛉乃体さしかゝる一葉かな　うえこ七夕　黒信

里雲ハ木杯し晴かり柿紅葉　うハリ　東推

早稲の穂まゆりさしく稲かな　ヨハリ　湖白

蜻蛉乃あそとふしきりや稲の中　うえこ玖珠　可庭

蜻蛉や稲まろの穂まとり付　備中言盛　十丈

こかま通まる粟穂の雀あれい飛　もおつるの辺　重行

あかいさ雨気半乃ともなし　越中井波住　如水

ゆくつゆや何としらぬ出まはる　紫苑　ふみこ戒誅　也湖

さしもさしまつくもみくれ　ミハリ　玄吟

白つゆ乙て馬や人見る萩の中　長州　交船

肥なまし

蝉折さ見しきをめでしきしの秋　涙是

まなりまし

はつかしき麿もさまり秋のくれ　安芸　竹原　一両

梢の尾すみ見まなして

鉛ふく乃夕し春を左もり秋乃くれ　風之

うつうつの千々るる　長州　一

中島も落つひしなくらうつる乳　露川

夕くれもあのやうまさく　惟然

何事さいまくつる花し　めくちくる　朱拙

栗乃穂やしうつくしまれく秋の色　越中富山　卯蝶　自悦

霧

ほつこりと紅葉にこぼるゝ霧の中　宗 其角

つゞく角よとこのあたりや霧の船　越中魚佐 麻又

草乃つゆ

女子繪に業平おもふ草の露　素義

小朝よきやゝともなき霧の露　野童

月

悼遠流の天宥法印

その玉を羽黒にかへせ法の月　芭蕉

稲月にきくや越路の草の味　北枝

川こひの畠をありく月見かな　杉風

名月や鞍をこゝろみる馬の面　行脚

くまの月波もたゝぬ水の面　女 秋色

ことしの月

こゝはまへあかりぬけて月の光　いう　去芳

　空也大ゝ饗の日なりける
　かつ楚にまし

おもひ出て

月澄や空也の鹿も(の)ゝ鐘の声　凧西

明月や志賀の浦田の稲の露いろ　ち月

かたりて海のまし

窓借きく加ともの浦の月夜ゝ　ゑりま　姫路　千山

名月や松の上くらましの声　もろ一まつの正　竹人

酒田にて酒

むかしれを雲まし月の(か)げ　旅化

島落ゝ人ゝ仙堂こり　仁列　八幡

名とり川の名あて落馬也

旅の中　素覚

旅人ともまくもし　西鶴一両

月ともとやかたよまくれ秋九　味　素翠

なつよし

菊の香や奈良ハいく代の男ぶり　芭蕉

菊花の讃

打婦しハ雁にかる菊のさかり八れ

雁鳴て月に的菊のつぼみかな　土芳

ゑし

風雲や時雨ふくるゝ比良おもし　如泉

海にかくれつゝあまよ峯の上　仝

山うしろの里をまきるしくれ哉　去来

あくるの日宿ハおくらしくれ　野坡

後のせのるすゝき雲のくれ　詞竹

酒よわきもんらいまも所くしたか　さが 野明

さゝ鹿乃声まで分別しく飛元　ふん二田 若芝

金閣もしして

まつのさい小春雲尺床も時雨すぎ　し 信徳

水仙や安あいよ時雨乃つまゝ折る　井中高遊 十丈

雪

九重は見なれぬ雪乃深さ哉　吉章

さらさらや峠のつむ嶺の雪乃雲　我峯

ゝゝせらのやらんとなはい舞る霜乃雪　ちくせん黒崎 沙明

奥州あるきなくて

薪もまうん霜りせし雪のまつかさよ　惟然

新雪を年しのくれあふさる　菜桃青と 風泣

雪雲乃いろ毅しー　備前 月和竹 涉明

六つるゝ乃雪乃くろきやなをの鳴　浪化

雪乃道程見に花乃矢きさよ　京 芋角

冬よ　あられ　霙のよ　冬の月　寒さ

冬の水や鴎のうきの　あまり枝　朱拙

冬の水よ江をなで迄や　風也

小坊主のつまはじけるあられ哉　いこまの坊中なる空　楳山

丹波路はつゞきし餅くよ霙の子哉　太つ　楳之

あし船の沙にきしるや冬の月　ヨハリ　素統ん

有明の手嫌かむおろしきさむさ哉　去来

こがらし　落葉　霜　千鳥

こがらしに雲より落る木の葉哉　ヨハリ　花次

めうが田の姥ゐる池に落葉かな　露川

こがらしにちらしくるゝ庵哉　おんこ畠　野紅

朝霜や橋杭のくちそくばかり　さか中なる空　一村

さゝつのぬるゝ乃声しや谷の有様　そば中　好風

題しらず

瀧幅や水の中なるいさりあし　其角

茶の花もよえらしすふる狐かな　ぶんご玖珠　頭水

枯野もし月よあかれは小雲かな　ぶんご日田　釣京

橋〳〵や暮いそぎけりこよみ売　孤屋

冬ゝ年の都ちかくやなるらし　蘇り　風竹

大根引

ひゝのてをしゝよのゝ大根引　みの関　一牛

夫婦しし菜の花ころや大根引　太屋

ほそ道ひの隣田にゝや大根引　鳴海　知足

今孫と七つ女ハさゝ大根引　風之

春霜よこりける色
松の梅もとゞへなかさる中大雄ハ　去来

餘こよ
ひやうんはちらつ茶つ餅くばり　為有
蔦月なれしよれしや餅搗　太至
桜町の噂もきよくよ年の餅　桃調
仙甚至
川ゝ年も競ちりかり市の人也　風之
年もとそや年の尾程乃停犯　去生

作舩集梓工へ出しける
ねは遊ぶ底ほきこわくし
露店こゝろし
雲の汁拳しもしはるゝ今かな　芭蕉
ふんこのゐ出雲狼之し
なれくるまゆ出し　ぬ
入あの山まことゆゆるやまひを　風之
陽炎やひとしに料れる備めり　納建

春風や青柳をさくら鹿乃乱　日田　幽泉

蓬室に蝸牛や鼠さわ　筑中ゑ里　濁向

こゝろ飛よ秋さへ川の落濁な　日田　朱拙

まるい雲にされたつるや五月晴　筑中三田里　北人

霧ふりよさりてあめも見さ仆　とりあたちめち　元灌

又しても百日紅乃花あらは　筑中八千石　温故　勤

妙峰の雲もまれ高る地乃嶋　筑中　居風

名月や川を甘し行雲乃花　筑中　荻人

名月乃家廻るや山乃上　筑中　林可

一畔いえなんとも落ちてまたさく　ちろさき　氷札

穂まし出さこ浮つめある野分　ふんこ珍洋　由風

蜻蛉乃体ましかるよ一羽のつ　ふんこ日田　墨信

飯時をわしめしまるや鶏船　同所　呼丁

稲あみをくつろきうる稲の中　筑中　路健

秋風や燕燕乃ひしゆめん　ふんこ日田　野竹

貌人に見てる子兄かれ躍るに　同女　里九

むくわと肥ふとらしや風の庭　長崎かく三千　助童
いつあをやねハつるくと縄か　かへこ日田　芝角
一雲叩たわるしらり馬の陰　かへこ秋牌　頽水
鳥飛でたゞつまつく雪野ひ　其ゝお中は信　眠山
河の板おぬ切かる行の雪　助童
花ゝしより嫁入てかてし柳かな　いゆるやさ　十丈
桜しや其の花葉中も比くるけ庭　ころさぎ　沙隣

長崎より来る去来子書中に
小倉より　ちかひろ
ちかよふてしやあさの舟躍り
あさハ漁夫乃女舟躍ハ寄そるなり
ちかハ黒崎沙明より
うらかれに星待顔や浦の宿
長さきに来たる年
なにしへも今ハ孫子や墓参り
同所諏訪大明神にまうでゝ
貴さも京めしうしくおもさその月

[illegible]

八月廿日

[illegible]

昭和36.3.14
6432